第３巻 第５号　　徳島　1916 年 4 月 16 日

戦場から

各地の戦場で起きていることは、相変わらずヴェルダン戦の影響下にある。

デューネ前線とブコヴィーナでのロシア軍大攻勢、またオーストリア前線へのイタリア軍の無用な突撃は西部戦線からわがドイツ軍を振り向かせようとする試みに他ならない。しかしそれは無駄なことで、ヴェルダンではすべてプログラムどおり事が進められており、ほぼ毎日電信文はドイツ軍がフランス軍から新たに陣地を奪い取ったこと、さらに捕虜を捕らえたことを伝えている。フランス側は一部その部隊を左翼から後退させ、これまでいた陣地の大部分をイギリス軍に委ねたにちがいない。そのイギリス軍はいまアラスにまで達しているようで、イギリスの新聞の報道によればドイツ軍の攻撃を待ち構えている。ドイツ軍の攻撃をこのように恐れていることから、ヴェルダンでのフランス軍の負担を減らすためにイギリス軍

がフランダースで自分の方から攻勢に出なかった理由が説明される。

イギリスのアスキス首相はパリでの会議からローマに向かい、そこからイタリアの前線に赴いた。そこでかれは、同盟国の勝利が確かなものという確信を得たというが、よりによってイタリアの前線でそんな見識を持つことになるとは。

コーカサスではトルコ軍がロシア側の報道によっても再び攻勢に転じており、ロシア軍が何ヶ月も前から奪取しようとしていたトラブゾンは今なおトルコ側の手にある。今コーカサスには疑いもなくダーダネルス海峡から戦闘と勝利に慣れた部隊の一部が到着しているのであるから、ロシア軍が再び後退を余儀なくされても不思議なことではなかろう。

メソポタミアから戦闘の報告が来ている。またしても命令権が新たに他の人に移ったとのニュースが届いているので、事態はなおもイギリスの思惑どおりには進んでいないようだ。アイクナー大将が更迭されてホリンジ中将に代わったのだ。この新しい男は、クテルアマラで今なお孤高に居座るタウンゼント大将を脅かすことになるのであろうか。どうも今回の戦争中にメソポタミアの最高指揮権を持っていたというのは、イギリス軍で名誉なこととしているような感がある。

この数週間、ドイツ軍がサロニキを攻撃するだろうという報道があちこちからなされていた。いくつかの前哨戦と飛行機による攻撃をのぞけば、これまでのところ平穏である。

わが軍の潜水艦は何週間も前から非常に活発な行動を成功裡に展開している。敵の汽船が何隻も沈められたという報道に接しない日はほとんど無いくらいである。

和平を結んだわけではないが、敵国がひとつ少なくなった。セルビアがオーストリア・ハンガリーとブルガリアとの間で分割され、独立国ではなくなったのだ。オーストリア・ハンガリーは徐々にセルビア人捕虜をその故郷に戻している。これについて敵国の新聞紙上を流れる水音を聞くのは面白いものであろう。

ドイツへの思い

激しい戦闘によってマランクールが征服された。同時にアミアンの敵は動揺を与えられている。英雄的な空中戦で敵の飛行機は墜落している。イギリス中にツェッペリン飛行軍団が死と破滅を広げている。サロニキは15人のドイツ人飛行士によって800発の爆弾を受けている。ロシア陸軍はドイツ軍の鉄壁の守りに流血を強いられている。祖国ドイツではすべての党派が一丸となっている。プロイセン陸軍省からは、兵員の補給、負傷者の手当、わが方の損害、わが方の武器について問題ないので安心してよいとの声明が出されている。

同時にこれほどすばらしいことがあろうとは。ドイツ人誰しも、その心が高鳴ろうというものである。ドイツ人よ、これらを目にして小躍りしたくならないか？崇高な戦闘、祖国の様子。すべて輝かしい真実で、短く直截に世界に示されたのだ。

われわれはここで再び長い間、電信が遠距離にまで伝えてくれる短いことばによって生きている。不安と心配で、敵は手紙や新聞をわれわれまで届かないようにしている。敵方には郵送路は開かれていて、自身の国々での状況について知ることを妨げるものはほとんどない。しかし彼らはそれを利用しているだろうか。一度でも伝えるべき素晴らしいこと、感動的なことがあるか。そんなものはない。彼らの新聞を手にとって見たまえ。常套句におしゃべり、ささいなつまらぬことばかりだ。

そんなところに割って入ってくるのがドイツのことば、ドイツの真実だ。ドイツ人にとってはこれで十分なのだ。それは故国の様子がどうであるかを伝えてくれ、正義と真実のために勝利するであろう祖国の同胞へのゆるぎない信頼をわれわれの心の中に呼び覚ましてくれる。ドイツ人よ、歓喜して踊りたまえ。故国がその力を弱めることなく存在することを、悪しき敵が鉄の輪をどれほど揺らそうと全く無駄でしかないことを日々心に書きとめ、確信とせよ。

H. H.　　（華徳日報）

シンフォニー・コンサート

徳島オーケストラはすべての音楽愛好家を日曜の夕べの音楽の楽しみに招待する。絶対音楽、即ち交響曲の他に２曲お聴かせする。これらは表題音楽として既に音楽会を征服しているもので、われわれにもきっと喜びを与えてくれる曲である。

第４回シンフォニー・コンサート演奏曲目

１．交響曲第１番変ホ長調≪太鼓連打≫

ヨーゼフ・ハイドン（1732 - 1809）

第１楽章　アダージョ - アレグロ・コン・スピリート

第２楽章　アンダンテ

第３楽章　メヌエット

第４楽章　アレグロ・コン・スピリート

２．ヴァイオリンのためのロマンス、ト長調

L. van ベートーヴェン（1770 - 1827）

３．序曲≪静かな海と楽しい航海≫

フェリックス・メンデルスゾーン = バルトルディ（1809 - 1847）

第２回シンフォニー・コンサートでわれわれ聴衆は、ヨーゼフ・ハイドンが 1791 年と 1794 年に自ら率いたロンドンのハノーヴァー・スクエア劇場でのコンサートのために書いた、12 曲のイギリス交響曲の中の第６番目の曲をすでに耳にしている。今回上演されるものはその第１曲目で、ティンパニーを連打する交響曲としてとりわけ有名である。ティンパニーの一撃に驚く第６曲と同じく、この曲でも周知の理由からティンパニーの連打のことを言わねばならない。これは第１楽章の冒頭と、同じ第１楽章で再びアダージョに戻る前、その２回耳にすることになる。

第１楽章の独特の瞑想的な導入部と潑剌とした音楽テーマにもかかわら

ず生真面目な基底の雰囲気、ときにソロヴァイオリンに彩られながらゆったりとした歩調で逍遙する変奏曲風の緩徐楽章、リズムと転調が風変わりなメヌエット、対位法的な色づけの豊富な終楽章、それらによってハイドンの変ホ長調交響曲は彼の交響曲の中でもっともすばらしい曲のひとつとなっている。曲想の大きさ、綿密な作曲、感嘆すべき造形力によって、初めてクラリネットを用い、交響曲作品の中で頂点をなすとされる所謂イギリス交響曲の中で精神的にもっとも重要で、もっとも芸術性豊かなものの一曲となっている。

ベートーヴェンはヴァイオリンのためのト長調ロマンスでわれわれと生真面目で高貴な対話を行っている。

コンサートの最後にはロマン派のメンデルスゾーンのたとえようもなく美しい序曲が演奏される。

序曲という独立した芸術形式はソナタ形式（交響曲）から生まれたものである。序曲とは一般に歌劇への導入又は前奏という意味であり、その中には２つの主要テーマが現れて、それがふつう展開部へと移っていく。内容的には、歌劇の冒頭にあって、その主要テーマを提示するわけである。これに対し、メンデルスゾーンの序曲は「真夏の夢の物語」への序曲と同じ程度に、序曲形式による純粋なロマン主義的音楽作品とみるべきである。メンデルスゾーンのすべての序曲において示されるのは、気品あふれる旋律、柔軟な発想、テーマのエレガントで明瞭な展開、音楽的感性の心地よい暖かみ、高貴なものからの逸脱への嫌悪である。

オーケストラのための序曲「静かな海と楽しい航海」では、航海の中で感じられる印象が適切な表現を求めてこれを発見し、メンデルスゾーンはそれを思い起こしながら快い楽音に転換したのである。

最初、作曲者は海の静けさをいわば共通体験させている。この雰囲気を打ち破って、突如巻き起こる風の模倣が始まる。命令が甲板を響き渡り、乗組員にぴくりと震えが走り、急いで帆が張られる。すると気持ちの良い風が帆桁を貫いてピュウピュウ唸って帆をはらませる。波のざわめきが聞

こえる（チェロとクラリネットによる描写､その後第２ヴァイオリンとヴィオラに移る）。全員に新たな覇気がみなぎる。というのも、昼の旅では風が良いと船は安全な港に入れるし、ひょっとすると故郷に着けるという人もいるかもしれない。夜になる。眠りに就いた船乗りは故郷と再会の夢を見る（チェロとクラリネットによるカンティレーネ）。時には何度となく荒れ狂う海は船の胴体を根底から揺るがす。しかし船は舵の命ずるままにくっきりと航跡を残してゆく。ふたたび夜が明け、太陽の光が降り注ぎ、やがて故国の海岸が見えてくる。全速力で港へと入り、水夫たちが帆をたたむのが見え（弦楽器と木管楽器の三連符）、錨ががらがらと海の中へと落ちて行き（トランペットの合図の前の弦楽器のトレモロ）、船はぎーっと音を立てながら突堤に接岸する（オーケストラ全体のフェルマータ）。船を歓迎する合図のトランペットが鳴り響いて、再会を喜ぶ歓声が序曲を締めくくる。

収容所展望

長らく待たされたが、やっと故郷からの郵便物がどっさり届いた。輸送期間が長かったのとロシアの検閲印が無い点から考えて、アメリカ経由で来たものである。実際新しい新聞のひとつには、日本収容の俘虜への郵便物は将来オランダからアメリカを経由して送られることになるという小さな記事が掲載されていた。輸送期間が長いために必然的に長い空白期間が生じたわけで、それが無くなった今これからふたたび定期的に郵便物を受け取れることを期待できるであろう。

今週は，運動場に出かけたのは１回きり、体操は２回とも悪天のために中止となった。

月曜日と火曜日の嵐の間、多数の漁船がここの港に避難してきた。空気

はときどき黄味がかったもやに包まれた。これは、アジアの砂嵐によって遠く海を越えて運ばれてきた、非常に細かい塵だそうである。

桜はいま満開である。当地には、広い花の海となるような大きな林はない。並木やちょっとした木の集団のみである。一番多く桜があるのは、町を望む眉山(びざん)の遊歩道である。薄紅色の帯が、はっきりと暗緑色の広葉樹や針葉樹から浮き上がって見える。夜には明かりの帯がこちらにまで下りてくる。木の枝に、提灯がぶらさげてあるのである。それというのも、暗くなっても桜見物の人が来るからである。自然から提供してもらえないものは、いずれにしろ飲み物の出店がたくさんあって、そこで買えるのだ。

日曜日の夕方は、救援委員会からの贈り物としてザウアークラウトとソーセージという祝祭料理をいただいた。残念なことに、缶詰は開けないままずらっと並べて加熱したので、開ける時に中身が一部飛び出すことになった。が、それを除けば、みんなキャベツが気に入ったのであった。

日曜の夜の娯楽として，カバレット（寄席）が催された。これは7時半から10時半までかかり、これには検閲官殿ご自身もさすがに辛抱できずに、公演が終わる前に姿を消す方を選んだ。観客の方はというと、終了時の多くの人の安堵のため息から判断するに、終わって嬉しかったようだ。広間に寝泊まりする連中にすれば、終了までじっとしている他にしようがないのだから。公演の第一部はほとんど反響が得られなかったが，第二部の方は本当に楽しいものだった。一晩向けにはこちらの方だけで良かったのではないか。

大阪収容所の火災によって、防火対策の措置がより厳しくなった。家の所有者は6時には戸締りをして、監視将校に家の鍵を渡さなければならなくなった。ところで個人持ちの家は、その寿命が展覧会までしか許されていないそうである。

寝坊には非常につらいことに、数日前から起床と朝の点呼が半時間早くなった。

袁世凱（最終回）

孫文は袁の成功に祝意を述べたが、同時に共和国は満州側から彼に与えられた権威を承認できないことを伝えた。しかし袁はおそらくその心配をなくす術を知っていたにちがいない。２月 15 日には共和国委員会が彼を暫定共和国大統領に選出したからである。

1913 年 10 月 10 日、ついに袁世凱は中華民国の大統領に選出された。それ以来、彼はその統治をまれに見る配慮と巧みさで維持してきた。中国は動乱と敗北にさらされずにすみ、彼の支配は上首尾であった。民衆がこのような男に歓声をあげ、太古からの法にのっとり天からの統治を委ねた[1]のは不思議なことではない。

イタリアの経済的不安

H. トレーン・フォン・デーヴィッツ

（以下の記事は「大ドイツ」誌からの転載であるが、イタリアの宣戦布告前に書かれたものである）

大イタリア、植民地、ヨーロッパの強国、拡大、移民を余儀なくされたわが同胞のためのふるさとの家、前へ、前へ。辻に立つ熱狂的な政治家はこう喚き立てる。何が何でも前進する。未来はイタリアのものだ。日々の困窮は忘れ去られ、口を大きく開けて喚きちらすお祭り男たちの頭上では雲一つ無く青い空が光っている。国民経済はがたがたである。産業の展開がないのだ。何年も前から統一イタリアの経済は重大な危機に見舞われている。君たちは大イタリアをどうしたいのだ、がっしりとした基礎もない壁を建てて。歴史を見たまえ、半世紀前の。統一イタリアというのは、は

1　皇帝の座についたことを指す

じめ単なる地理的概念でしかなかった。北部の有能で労働意欲のある男たちが新しい国家体制の基礎となる杭を打ち込んだのだ。経済的な作業が始まったが、彼らの恩恵はある一定の限られた地域を出るものではなかった。中部と特に南部イタリアはなおも経済的には無気力な状態だった。国家自体も無力だった。政府は戦争目的に金を必要としていた。1866 年の決算では 2 億リラの赤字であった。強制国債と強制相場がその必然的な結末である。金のプレミアムが 20 パーセントまで上昇した。そこにピエモンテの鉱物学の教授がこの混乱を解決してみせた。クエント・ステッラスは何度も財務大臣をしていて、赤字をなくす術を心得ていた。無論、その厳しい課税により国民は極めて重い負担を背負うことになる。やっと興隆しかけた産業はまたしても沈んでしまう。しかしこの策は全体としては成功した。国家は自由となった。10 年後、議会革命によって彼の仕事の成果はつぶされた。若々しい楽天主義から新しい運動の指導者たちが生まれてきたのだ。全ての領域で改革がはじまる。経済は自由でなければならないというわけで、強制相場は廃止され、穀物税が取り消され、銀行の自由が宣言された。南部の素朴な人たちの国でよく見られるように、人々は慌てふためく。統一的な計画などなかったのだ。努力の行く先は大国主義に傾く。早くも「大イタリア」の計画が抗いようもない勢いで浮上する。ところがその時、国自体では経済的な困難がますます大きくなっていた。信用貸しは体系だっておらず、大きさもそれぞれ異なる 6 つの紙幣発行銀行が競争で互いを食い合っていた。80 年代半ばには、そのずっと以前から予言されていた崩壊が生じる。秩序ある経済状況においては副次的な意味しか持たない出来事なのだが、イタリア経済を破滅の縁にまで追い込んだ。トリノでの銀行の破綻が大きく周囲を巻き込んでいく。イタリア北部全体と中部の大部分がそれによって重大な影響を受けた。クリスピはこの状況を一瞬であるが、それなりに救った。彼は紙幣発行銀行に支援を行うよう働きかけ、その結果すでにいくつかの場所では破綻に瀕していた経済活動を支援したのだった。しかし 5 年も経たないうちに、苦労して維持していた建物

がまたしても崩れる。90 年代の銀行スキャンダルは今なお記憶に新しいところである。ロマーナ銀行では 900 万リラの不足が生じ、その流通貨幣は旬報報告の 2 倍の大きさであった。やっと息をつきかけた経済活動は再び重大な危機に陥った。証券銀行大手の 2 行、ジェネラーレ銀行（Banco Generale）と動産信用銀行（Credito Mobiliare）が破産した。新しい財務大臣のシドニー・ソンニーノには、この好ましからざる状況を公に認めるより他に取る道はなかった。財政は 1 億 5 千万リラの赤字となり、商工業は完全に不振にあえいでいた。国家はふたたび増税と強制相場をたくみに操作することで救われたが、経済活動はぬかるみにはまり込んだように停滞していた。ソンニーノから財務を引き継いだルッパーティは、イタリア経済は自力では体力を付けられないことを初めて認識した。彼の功績はイタリア工業のために外国の、とりわけドイツ資本を国内に導入したことにある。ドイツの資本と企業精神を基礎としてイタリアの地に新しい証券銀行、イタリア商業銀行（Banco Commerciale Italiana）とイタリア信用銀行 Credito Italianao）が生まれた。至るところへドイツの金（きん）が向けられた。新しい方面で産業を興す活動が生まれ、今日上部イタリア地方で盛んな電気産業がはじめて成果を祝することとなった。

徐々に国家は這い上がり、以前の赤字は新世紀の初頭には黒字に変わった。ここでもドイツの金が協力していたのである。90 年代初頭には 7,200 万リラもの利息がドイツに渡っていた。しかしドイツがイタリアの国民年金に投じた巨大な資金によってこの若い王国にどれほど大きな貢献をなしたかは、洞察力のある人なら誰でも判断できるにちがいない。イタリアの年金が後に 5%から 3.5%に転換された際、ドイツの金の還流も引き起こされた。その結果今日イタリアの国家債務における投資額は 4,000 万リラに過ぎないと見積もられている。しかし、かつては貢献がなされたのであって、イタリアが前進するための足がかりが見つかったわけである。ところが経済活動の改善はいぜんとして見られない。奇妙なことにこのイタリアでも、かつてフランスでも見られたのと同じような過程が繰り返されてい

る。必要な資金の不足のために商工業が停滞する一方で、大小資本家の流動資金は国家債券に従順な投資先を求め、見つけたのである。つまり、われわれがフランスの国家体制で年金経済とよく呼んでいるものが、ここで小規模に生じた。ここにちょうどこの時期に始まった帝国主義が政治に入ってきた。ローマ銀行（Banco di Roma）に率いられたいくつかの産業が政府を植民地政策に引き入れた（ローマ銀行は以前からトリポリで包括的な準備を進めていたのである）。こうして元々この銀行の庇護のもと、そして銀行自身とその黒幕のためにトリポリ戦争が始まった。もともとヴァチカンの資金を元に設立されたローマ銀行はそれこそ「大イタリア」への国民的熱狂を沸き起こしたのである。百リラの株式で小資本家を味方につけたが、彼らが銀行の背後にずらりと並んでいようが問題ではない。こうしてローマ銀行は帝国主義的政策の時代に主導権を握ったのである。

イタリアはトリポリで勝利した。その戦争はイタリアに幸運をもたらしたか。さしあたり利益についてはまだ話にならない。戦争によって財政が新たに弱体化した。1910 年以来イタリア国家は内部に 17 億リラを取り込んだが、巨大な出費が本当に生産的になるのはいつなのかは、いまだ全く分からない。北アフリカ地区は非常に金がかかるのである。ルッパーティ元首相はリビアへの支出を 20 億リラと見積もっている。それによってどんな方向に導かれるのだろうか。征服政策はイタリア経済にきわめて悪い影響を与えてきた。イタリア経済は、他の国では特にこの数年見られてきた繁栄を共有できないでいる。国家は自身の必要のために産業から必要な資金源を取り上げてしまったのだ。輸出と労働市場にとって重要な産業部門の金融体制でまさに危機的状況にまで至ったのである。1909 年から 1914 年までイタリアの企業の収益は微々たるものであった。

つづく

チェス・コーナー

（駒の略語　K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン）

第 103 問の解答

1) Sd4 – c2　　任意の手

2) D で摘み

第 104 問の解答

1) Sd6 × f5　e5 - e4

2) Df1 - c4　Kf4 × f3
(× f5)

3) Dc4 - f1 (f7)　詰み

他の変化も容易

正答を寄せたのは Jos. ヴェーバーである。

第 105 問

白：Kd1, Dd2, Td6, La7, e4, Sb3, g8, Bc6, f3

黒：Ke5, La1, h3, Sb7, c1, Bg3

２手詰め

第 106 問

白：Kf6, Dc3, Td4, Sc4, Bc2

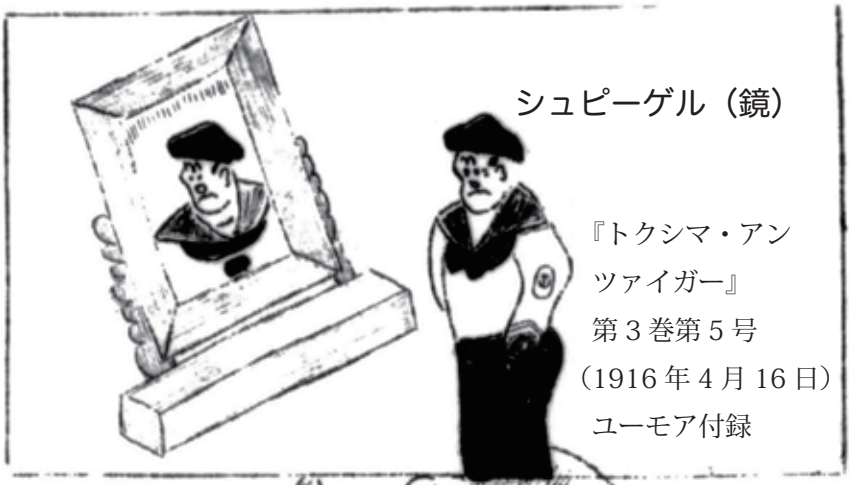
黒：Kc5, Lb5, Bc6, f7

３手詰め

郵便箱

古くからの購読者殿。残念ながら紙面不足のため、この場で貴君の数多くの質問に答えることができません。もちろんお望みの情報は、口頭でお伝えする用意があります。

編集部



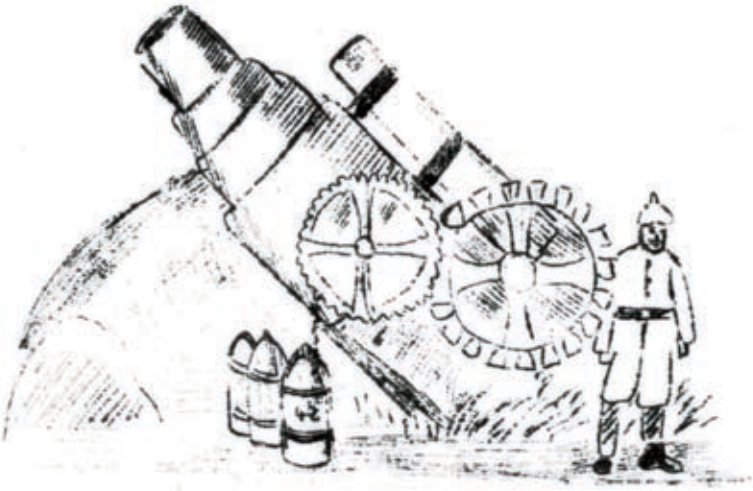
シュピーゲル（鏡）

『トクシマ・アンツァイガー』
第３巻第５号
（1916 年４月 16 日）
ユーモア付録

ペーピ坊やの想像するフリューゲルマン

注：Flügelmann「フリューゲルマン」は軍隊隊列の整列の際、最前列右端にいる「側兵」のことだが、「翼男」と解することもできる。

働き者のベルタ [2]



ドイツは 44 年間平和に暮らしていた

それを好ましく思わぬ隣人どもがいた

ならず者のイギリス人がすべてを書き上げた

その計画とは、ドイツを消すこと。解体してしまうのだ

すべての街角でわれわれは守りについた

そして、驚いたことにやつらを見舞ったのは

われらに独自のもの、それが火をふきはじめた

ドン、ドン、ドン、ドン！あれあれ、何が起きたのだ

---

2 「ベルタ」は当時のもっとも有名であった 42 センチ砲のこと（挿絵参照）。Dicke Berta「太ったベルタ」というあだ名で呼ばれていた。

（リフレイン）

あれは働き者のベルタ

ルール地方のエッセンから来たやつ

その腰回りは

たったの 42 センチ

彼女はドイツ生まれ

われらの大きな誇り

邪魔をするものは吹き払い

徹底的に片付けてくれる

リュッティヒの要塞にはレーマンおじさんがいる

彼は思う。ずるがしこいドイツ人め、ここには決して

入らせんぞ！

このコンクリートの城塞に当たればお前たちの力など

木っ端みじんだ

撃つがいい、お前たち皆萎えるまで堪えてみせる

そして彼はゆったりと腰を落ち着け、心配は何も無く

このリュッティヒの彼に髪一本触ることはできるまいと思う

突然地面が揺れ、彼は椅子から転げ落ちる

彼は、畜生、ドイツ人め、今のは何の冗談だ

ドン、ドン、ドン、ドン！あれあれ、何が起きたのだ

（リフレイン）

あれは働き者のベルタ

ベルタはこれまでいくつもの英雄的行為を行ってきた
敵の気づかぬ間に一発お見舞いした
ベルタがこんなにドンと音を出すのにはうっとりとする
このドンが多ければ多いほど、ベルタに敵は
怒りをつのらせる
その昔、ものぐさグレーテ[3]がいたが、
今のわれわれには熱心なベルタがいる
その喉口を開けるとき、誰もが分かる
これから熱心なベルタが歌を怒鳴り始めるのだと
ドン、ドン、ドン、ドン！あれあれ、何が起きたのだ

（リフレイン）

あれは働き者のベルタ

3　faule Grete「ものぐさグレーテ」は 15 世紀に使われた巨砲。